

◆研修会特集◆

相互利用 (ILL)

川野真樹

I. はじめに

相互利用は相互貸借とも言い、英語で InterLibrary Loan (ILL) と言われている図書館サービスの一つである。利用者が必要とする資料が自館にない場合、所蔵している図書館へ資料の貸出もしくは文献複写を依頼し、反対に他館からの依頼に対しては所蔵資料を提供し合うサービスで、受付館の好意に基づいて運営されている非営利、相互扶助的なサービスである。ILL 業務を行うには図書館機能を有し、図書館ネットワークでの各図書館の蔵書目録提出による総合目録作成と協力関係の合意(協定)が必要とされている。当院図書室は2007年後半に ILL サービスを始め、2013年で約6年になる。その間の当院図書室での ILL 業務について報告する。

II. 当院の図書室概況

当院図書室の蔵書は図1に示すように図書は少なく、雑誌中心の構成である。患者図書室と職員図書室を併設し、職員と患者さんへの図書室サービスを同時に行っているが ILL は職員に対してのみ行っているサービスである。患者さんから未所蔵資料の文献の入手について質問された時は、京都市民・府

図1 当院図書室の概況

• 面積: 90,91m ²
• 蔵書(2012年): 和雑誌 231 (EJ; 10)
洋雑誌 66 (EJ; 51)
和図書 1,622
洋図書 24
• 電子資料(2012年):
医学中央雑誌 Web 版、メディカルオンライン、最新看護索引 Web、Springer Link Hospital Edition、DynaMed、Medline with Full Text、The Cochrane Library
• 利用者: 職員、患者、患者家族、登録医
• 参加図書館ネットワーク (ILL サービス):
日赤図書室協議会 (S・F・X)
近畿病院図書室協議会 (KITOcat)
(NACSIS-CAT/ILL)
(京都府立医科大学附属図書館医学情報ネットワークサービス)

民に公開している京都大学医学部図書館や京都府立医科大学附属図書館が所蔵している資料の時は両図書館を紹介し、それ以外の資料の時は公共図書館や国立国会図書館の文献複写サービスを紹介している。

当院図書室は、ILL を行うに当たって参加している図書館ネットワークの総合目録は、日本赤十字社医学図書館のリンクリゾルバシステム (SFX)、近畿病院図書室協議会の KITOcat、NACSIS-Cat/ILL があり、それに加えて京都府立医科大学附属図書館が関係病院に対し行っている医学情報サービスがあ

KAWANO Maki

京都第二赤十字病院 図書室

る。この4つの図書館ネットワークサービスがなければ、当院職員に対して充実した文献提供を行えない状況である。

III. 当院図書室の ILL 状況

2008年から2012年までの当院の相互利用の件数(図2)をみると、2008年は1,795件あった依頼件数が2009年には1,321件と約3割程度減少した。減少した理由として、2009年にメディカルオンラインを導入したことが考えられる。一方で当院から依頼する文献のほとんどが日本語の文献であるため、2010年にMedline with Full Textを導入しても文献依頼件数はそれ程の減少はなかった。受付件数については2008年には69件であったが2009年4月からNACSIS-ILL文献複写等料金相殺サービス(NACSIS-ILL)に参加したことで407件と約6倍に増加した。

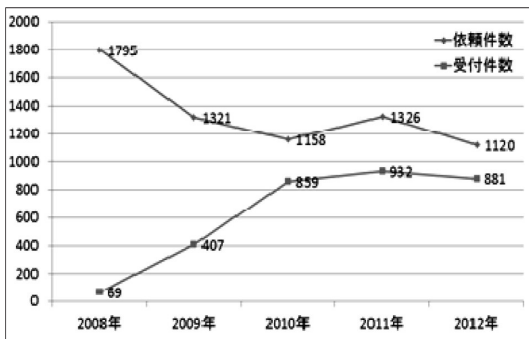


図2 当院図書室の ILL 状況

IV. 当院図書室の ILL 業務について

1. ILL 依頼業務

1-1. 利用者から文献依頼受付

方 法：SFX (Email)、電話、参考文献リスト・手書きメモの持参。

確認事項：①カラーコピーの必要の有無、何時までに必要などを確認する。

例) 来週の患者への説明用の文献。○日切の学会発表のために必要。その他に医中誌の検索結果のプリントアウトを大量に持参され、検索結果がほぼ会議録の場合は、必要とされる情報内容を質問し、再度文献検索を行い、必要文献を絞り込むこともある。

②著作権上、ILLでの文献複写に対応できる申込み内容か確認する。

例) 図書や雑誌の中の1文献ではなく、1冊全頁文献複写依頼時は著作権上不可であることを利用者に伝え、必要頁(箇所)を提示してもらう。

1-2. 書誌・所蔵確認

作業内容：雑誌文献は医中誌、Pubmedで確認、図書はCiNii ArticlesやGoogleで確認し、それでも頁数など書誌事項が不明な時は所蔵施設へ参考調査の依頼を行う。

確認事項：当院所蔵資料か当院で利用できる電子ジャーナルかの確認を行う。学会誌、病院誌は、学会HPや病院HPから無料でダウンロードできる場合があるので確認する。

例) Journal of B.U.ON.2007 12(1)：41-4.の文献複写依頼があった。SFXで確認すると、フルテキストへのリンクもなく、所蔵館はありません、の表示で、Googleでタイトル検索をしてもヒットはなかった。ジャーナルのHP

<<http://www.bu-on.org/jbuon/>> で確認すると無料で全文がダウンロードできた。

1-3. 所蔵館へ依頼

作業内容：京都府立医科大学所蔵資料→所定の依頼用紙での Email 依頼。

京都府立医科大学未所蔵資料→NACSIS-ILL システム、国立国会図書館 Web 文献申込みシステム、KITOcat では Fax、Email で依頼。

確認事項：いつも受付内容・状況が同じとは限らないため依頼前に依頼先の図書館情報を確認する。

例) 14時以降の依頼は次の日対応、雑誌製本中、速達対応不可、支払い方法変更など。特に夏季休暇には蔵書点検や製本作業をする図書館が多いため、7～8月には依頼先館のHPやNACSIS-ILL、KITOcatの機関情報で確認を行っている。

1-4. 文献確認・依頼簿入力

作業内容：送付書と複写物の確認(枚数・送料・合計金額)。内容が不一致の時は依頼先館へ連絡する。

1-5. 利用者へ連絡・会計処理

作業内容：複写物を利用者に渡した後、通知書と支払伝票を揃えて会計課に提出。

2. ILL 受付業務

2-1. 受付方法

受付方法：NACSIS-ILL システム、Fax、E-mail で受付。

確認事項：書誌・所蔵確認、送付方法(普通郵便、速達、FAX)、料金請求方法(NACSIS-ILL 相殺、銀行振込)、カラーコピー希望の有無などを確認する。

2-2. 書誌・所蔵確認

作業内容：貸出中、未所蔵などの時は速やかに謝絶。無料でダウンロードできる文献の場合は URL を記入して返信。書誌事項が不完全な依頼については確認ための返信を行う。

2-3. 複写

作業内容：申込み内容(カラー、モノクロ)に従って複写を行う。

2-4. 通知書・受付簿入力

作業内容：申込み内容と複写を確認し、受付番号、受付日、枚数、郵送料金を記入。

通知書と複写物、NACSIS-ILL 相殺非参加館には支払い方法の通知書も同封し発送。

2-5. 郵送・会計処理

作業内容：申込書と振込伝票を揃えて会計課に提出。

V. まとめ

ILL を行うためには自館の目録を整備し、図書館ネットワークの総合目録に参加することが求められる。当院は複数の図書館ネットワークに参加しており、それぞれ異なる総合目録があるため、参加ネットワーク毎に総合目録を更新する必要があるが、各総合目録において病院図書室協議会では臨床系や病院雑誌、NACSIS-ILL では海外誌や古い文献の充実などの特徴があるため各図書館ネットワークに参加することで、当院図書室の文献

提供サービスの充実に繋がっている。

当院図書室では文献データベースの検索結果から冊子体の所蔵状況がわかる様に医中誌、Pubmedには所蔵アイコンを表示、利用可能な電子ジャーナルについてはSFXとPubmedのリンクアウト設定を行っている。しかし利用者から図書室へ依頼される文献複写の内、所蔵資料や契約している電子ジャーナル、オープンアクセス資料などがあり、実際に職員から依頼された文献数を依頼件数に含めると図2に表示されている件数より2～3割多くなる。図書室に依頼しなくても利用可能な資料の確認ができてないことで起こる利用者の文献入手までの時間のロスを減らすために参考文献の書誌事項読み取りや文献データベースの検索結果からの所蔵情報や利用可能な電子ジャーナルの確認・利用についての教育や広報を行うことも必要と最近では考えている。

VI. おわりに

病院図書室は大学図書館と比較すると所蔵規模が小さく、職員からの文献依頼が後を絶たない状況である。一人職場が多い病院図書

室担当者の業務は図書室業務全般に渡り、施設によっては兼任の場合もあるため、ILLでは一方的な依頼に終始してしまい、自施設の目録の整備や相互目録の定期的な更新が疎かになってしまうこともあるが、ILLのルールやマナー、知識の習熟の他に自施設の図書室機能の確立、総合目録の更新、図書館ネットワーク活動への参加によって利用者へのILLサービスが充実する。当院の図書室機能の整備が始まったのは2006年以降であり、所蔵資料は乏しく、大学図書館や他病院図書室への依頼無しには当院職員に対して充実した文献提供サービスは行えないが、図書館ネットワークに参加し、総合目録に協力することで、ILLによる文献提供サービスが可能になっている。当院図書室も一人職場であり、図書室業務について院内で相談する相手がいないためILLだけでなく、レファレンスや図書室業務の相談などで他図書館に助けをもらうことが多い。だからこそILLをはじめとして図書室業務は「図書館同士の助け合い」で成立していることを忘れず、図書室機能の向上を図りたいと考えている。